特別支援学校における医療的ケア項目と看護師業務の負担感

○田中　千絵　　猪狩　恵美子
（聖マリア学院大学）　（福岡女学院大学）

KYE WORD：特別支援学校、医療的ケア、学校看護師

（はじめに）

2012（平成24）年度より「介護職員等による痰の吸引等の実施のための制度」が施行され特別支援学校における医療的ケア実施体制においても新たな動きが始まっている。しかし、医療機関ではない特別支援学校における医療的ケア実施には多くの課題が残されている。特に教員実施が開かれたなかで、改めて医療職である学校看護師の果たす役割は重要な意味を持つといえる。しかし看護師の配置人数は自治体・学校による違いが大きい。また、児童生徒の障害の重度・重複化が一層進み、高度な知識と技術が求められ、ケアの質や回数などケアにかかる時間においても個別性が高い。

こうしたことから、学校生活における医療と教育の保障を進めるために、看護師の仕事量や技術の難易度など具体的に把握し、個々の児童生徒のニーズに応じて行われる医療的ケアと関連業務をスコア化することにより、適正な実施体制を整備することが必要ではないかと考える。

（目的）

本研究では学校看護師の一日の業務内容とケア項目、回数、そのケアに対する負担感を調査し学校看護師の業務項目を具体的に明らかにすることを目的とする

（方法）

研究対象：全国の看護師配置のある特別支援学校（聾学校は除く）427校の学校看護師1450名

調査期間：2016年12月から平成2017年3月末

調査内容：①対象者の属性②看護師配置状況③看護師業務の現状評価③学校看護師の一人当たりの 1 日の仕事内容細目、所要時間、回数、負担度（負担度はVASを用いる。）

（倫理的配慮）

聖マリア学院大学の倫理委員会の承認を得た（28 - 008）

（結果）

回答401名（回収率27.7%）のうち有効回答は328名であった。内訳は常勤看護師53名、非常勤看護師270名、無回答5名であった。看護師経験年数平均19.7年、そのうち学校看護師経験年数4.60年（n=308）であった。

吸引には口腔内、咽頭、鼻腔内、咽喉頭、気管内の吸引が含まれ、吸引行為のほかに排痰のために体位ドレナージ、スクイージング、持続吸引管理、気管孔周辺の保清、気管カニューレの固定、吸引器の準備・片付けなどが行われていた。また経管栄養では食事の準備、口腔ネラトン・胃チューブの挿入確認、経鼻・胃瘻・十二指腸瘻・腸瘻からの栄養・水分補給、中心静脈栄養、薬物注入、ガス抜き、瘻部の保清、接続ボタンの確認など栄養に関する多くのケア項目が挙げられた。少数であったが歯磨きや義眼洗浄なども行われていた。

看護師の負担感が強いケアとして、経管栄養中、緊張が強く、逆流や注入速度の不安定、胃瘻からの漏れなどがあり、常時目が離せない事例や、吸引時出血しやく技術的に神経を使う事例、体温調節が難しい子どもに対する頻回のバイタルサインチェックと更衣、おむつ交換なども回答された。側彎が進み呼吸状態が悪化して目が離せないなど成長に伴って高度な対応がもとめられる傾向も見られた。また、ケア内容だけでなく複数配置校では常勤・非常勤によって業務が異なり看護師間での子どもの体調の報告や業務など引き継ぎの連携もとりにくくも難しく負担感につながっていた。

しかし、3号研修を受けた教員と協働でケアを行っている場合、負担が軽くなったと感じている看護師も少なくなかった。

（考察）

学校看護師の行う業務は、医療的ケア３行為に留まらず多岐に亘り、高度な知識と技術を要するものも見られ、特に一人配置校での学校看護師の負担が重いと考える。これら高度な医療的ケアに対応し、子どもの学校生活を保障するためには、看護師と教員・養護教諭がさらに個別性の高いケアの方法と連携の在り方を検討する必要がある。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究C「医療が必要な障害児のよりよい地域生活支援のための『医療的ケア必要度スコア』の開発」26463582（平成26～29年度）による研究成果の一部である。

（TANAKA Chie　IKARI Emiko）